

日本語接続詞「で」の成立 —文法化の観点から— 百瀬みのり

本発表は、日本語接続詞「で」の成立が文法化の観点から説明されるべき通時的变化であると考えられることを実証的に述べることを目的とするものである。『日本国語大辞典（第二版）』によれば、接続詞「で」は「接続詞「そこで」、「それで」などの「そこ」「それ」が略され、助詞「で」が自立語化したもの」（同、523 頁）とされるものの、その過程については詳しく述べられていない。そこで本論ではそれを明らかにすべく、Traugott (1995) 等が主張する文法化の観点から、「そこで」、「それで」から接続詞「で」が成立する過程について、形態、意味、機能の変化について通時的に用例を確認することで実証的に述べる。

発表では、日本語接続詞「で」の成立が接続詞「そこで」、「それで」の指示詞部の省略という共時的な語形変化というよりも文法化の観点から説明されるべき通時的变化であると言ってよいと考えられる証左として、接続詞「そこで」、「それで」から接続詞「で」の成立に際して認められる一連の変化に文法化に含まれる現象があることを述べた。その具体的なものは、近世後期から見られた接続詞「そこで」、「それで」の成立後である近代以降に接続詞「で」が見られるようになったという成立時期の差異、意味の漂白化、再分析、音韻的弱化、語用論機能の強化、接続詞「そこで」、「それで」よりも接続詞「で」の前後に目立って見られる話者交替が聞き手の推論によって理解される対話に見られる、語用論的含意を利用した結果成立する形式であることである。